

短編集?されど、この恋
は終わらず。

いろはにほへと??

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼と彼女と彼らと彼女らの恋愛話

あるいは茨の恋の道

ハッピーエンドは明々白々

ともすれば、言葉にしがたいエンドさえ

さりとして、やはり純粹に

言葉は違わず

されど、この恋は終わらない。

目次

好意の核心	1
正解の祝福	16
かおりのリズムで	28
かおりのリズムで	36
はるのんは手に入れたい。前編	53
Interlude	
First	
part	62

好意の核心

「結衣先輩って好きな人いるんですか？」

今日は、ゆきのんというはちゃんと私で、プチお泊まり会を開いていた。

場所は私の家。三人でお風呂に入った後に、いろはちゃんがいきなりそんなことを聞いてきた。

「え、えーつと……あはは」

なんて答えたらしいのか分からなくて、私はついごまかしてしまった。

「結衣先輩ってモテるじゃないですか。でもなかなか彼氏作らないしー。好きな人でもいるのかなって」

「一色さん、あまり人のプライベートに踏み込むべきではないと思うのだけれど」

「じゃあそういう雪ノ下先輩は？」

「え？ 私……その……」

注意しようとしたはずが、ゆきのんはそれきり俯いてしまった。よくある女の子同士のお話のはずなのに、どうにも私たちには難しい。いろはちゃんもそれは分かっているはずだった。

「……私はいますよ」

「そ、そう……」

「そうなんだ……」

三人で私のベットに座っていたけど、ゆっくり寝る姿勢になる。枕投げなんてするはずもなく、シングルベッドに無理に三人入る。

「それでー結衣先輩は？」

「……えーつと……」

「いますよね？」

「うん……」

いろはちゃんに押し負けてしまった。そんな体だったけど、いろはちゃんが言った手前、私も必然的に言わないといけない。私はそう思った。

「雪ノ下先輩は？」

「私は……分からない」

ゆきのんは諦めたように、ため息と一緒に答えを吐き出した。

「そうですか」

いろはちゃんは、特にそれ以上探求しなかった。それが言わずとも分かっているように、私は少し嫉妬してしまった。

「私の好きな人はぶっちゃけいい所ほとんどないです」

「へ、へーそうなんだ」

しどろもどろに返事をする。

「結衣先輩は？　どんな人ですか？」

「んー、えーつと、あはは。私も、そんな感じかな」

「でもたまに優しいんですよね」

「うん、見えないところっていうかかなり遠回りだけど」

これがヒッキーの言う、「ぎまん」ってやつなのかもしれない。

きつとお互い分かってて、それでも口に出さないように気をつける。

ヒッキーは、きつと嫌いだ。

「出合いのきつかけは？」

黙り込んでいたゆきのんが口を開いた。しかも、ゆきのんがするような質問ではなく

て、私たちは一瞬言葉に詰まる。

「私は生徒会長選挙です」

「私は……助けてもらったの」

ほとんど核心をついていて、それでも決定的な答えは出さない。

きつと三人とも分かっているのに。

「ほんと、私にいつもいっつもあざといとか言いながらあつちの方がよっぽどあざといですよ」

留年してくれないかなー、なんて言っているのはちゃんにはにかむ。

「あはは……確かに、あざといかな？」

「でもいざという時は頼りになるんですよ」

「まったくその通りだね」

返事をして、たははと笑う。

「しかも周りは女の人ばかりだし」

「それそれっ！　ほんと、それだよね？」

私は含みを持たせたまま、いろはちゃんの目を見つめる。いろはちゃんはやっと笑った。

「ですよねー。ほんとやめてくれないかなあ」

今度はいろはちゃんが私の目をまっすぐ見つめてくる。お互い意図するところは分かっているし何だかおかしくなってきた。お互い意図するところは分かっているし何だかおかしくなってきた。

ふふつとゆきのんが笑みを漏らしていた。

「どしたのゆきのん？」

「いえ、火花が散っているように見えたから」

「やだなあ雪ノ下先輩」

「あははそうだよ、ねえいろはちゃん」

まるで映画でみた頭脳戦のように、お互い本音を隠して、でも相手に伝わるように身振り手振りを振りかざす。日本人特有の、空気を読むという行動で成り立っていると思うと少し面白い。

「じゃあそろそろ寝ましようか」

ゆきのんの言葉に相槌をうってから、三人で一つのベッドに潜り込む。狭くて、きつくて、暑苦しいけど、やっぱり楽しい。

ヒッキーもいたらもっと楽しいのかな、なんてあるはずも無いことに私は思いを馳せる。

しばらくそんなことを考えているうちに、私は徐々に眠りに落ちていった。

× × ×

結衣先輩――。

誰かが私を呼びかけるように起こす。

ふへっ？　なんて間の抜けた声を出しながら、私はゆつくり起き上がる。目線の先にはいろはちゃんがあった。

「結衣先輩、奉仕部で小町ちゃんの合格祝いをするみたいです。今日緊急招集がか

かつて、雪ノ下先輩は一度身支度をしに戻っちゃいました」

「へっ今日?! いきなりすぎない?!」

私はおおげさに驚いたけれど、すぐに昨日が合格発表だったことを思い出して、ヒツキーのことだから妹愛が空回りして、信じられない行動力を発揮したのだと、これまた不思議な程に結論づけることができた。

「行きますよね?」

いろはちゃんが私に問う。いろはちゃんは元から今日は生徒会の用事があつたみたいで、支度を済ませて泊まりに来ていたのだ。

「うん、もちろん!」

元気よく返事をしてから、私は制服を準備し始めた。

「着替えとかあるし、先行つていいよ」

待つていようとしていたいろはちゃんに一応伝えておく。いろはちゃんは、はい、と言うとすぐに立ち上がった。

「じゃあ学校で待つてますね。確か10時半集合です」

「うん、わかった」

部屋を出ていこうとするいろはちゃんにふりふりと手を振った。いろはちゃんも返してくれて、そのまま私たちは分かれた。

今は何時なのかなと壁時計を確認する。

『AM 10:00』

つてあと三十分しかないじゃん！

× × ×

「お、悪いな由比ヶ浜」

はあはあと息切れしながらも、何とか時間ないに奉仕部へ入ると、中は何か煌びやかに飾られていた。いったい何時から用意していたんだろうとヒツキーの方を見ると、眠そうな様子もなく、妹ってすごいなってつい笑ってしまう。

「じゃあ小町の入学祝いを始めたいと思います！ 皆さん今日はお集まりいただきありがとうございます。平塚先生、雪ノ下、由比ヶ浜、そして戸塚！ 今日妹のためにあります」

ヒツキーが音頭を取るとは思わなかったのと、まるでヒツキーとは思えないほどに、堂々と喋るから一瞬誰なのかわからなくなっちゃった。

「つて先輩！ 私もいます！」

いろはちゃんが大きく声を上げた。確かにいろはちゃんの名前呼ばれていなかった気がする。

「あれ言わなかったつけ……」

どうやら本当に忘れていたみたい。

「お兄ちゃんさいつてー！ こんな可愛いお嫁さん候補……ごほつごほつ……会長さんを忘れるなんて！」

「えっ、いつから一色と小町に繋がりが……。やばいつて、あざといの二つ混ざるの……」

「まあ何はともかく最低ね比企谷くん」

「八幡……」

「比企谷……」

ヒツキーは大きなブーイングを受ける。私だけ何も言わなかったからかヒツキーは私を見る。

そ、そんな仔犬みたいな目で見てもダメっ！

「ヒツキー最低……」

「わかったよわかった！ ごめんなさいー」

ヒツキーはどうとう観念して謝る。それからいろはちゃんがズレてしまった話を戻す。こういうところではいろはちゃんの生徒会長としての力が発揮されるような気がする。

「まあ、じゃあ始めるか……」

疲れきったヒツキーが呟いて、ようやくパーティーが始まった。

× × ×

夜は七時。あのあとに二次会ということで、みんなでカラオケに行ったり、パフェを食べに行ったり結構好き勝手に盛り上がった。

途中好きな人の話が始まって、中学生の頃のヒツキーの話が暴露されたりして、気まぐしいところもあつたけれど、なかなか面白かつた。

そして今。

私がちらちらヒツキーを見ていたことに気づいた小町ちゃんに頼まれて、ヒツキーと二人で買い物に行くことになってしまった。明日は学校なのに、今日はヒツキー家にもんなで泊まるみたい。私たちが買い物に行っている間にヒツキーの家に移動するらしい。

「で、なに、またケーキ買うんだっけ？」

「あー、うん、そう……」

思ったよりもうまく喋れなくて緊張する。何の話をしよう、なんて考えていると、突然泣き声が聞こえてきた。どう考えても小さな声の泣き声。夜道に泣き声って怖っ！
なんて思ったけど、ヒツキーはずんずん進んでいく。

「あの公園か？」

どうやら声の招待を確かめようとしているようだった。私がやめようという間もなく、ヒツキーは公園の中に入ってしまった。一人で待つのも怖くて、ヒツキーの袖を掴みながらついていく。

すると、少しも歩かないうちに小さな女の子がいた。見た目的には小学校高学年。ティシャツにスカートで、今の時期にはどう考えても、おかしい。

「おい。どうした」

不思議がることもなくヒツキーは女の子に声をかける。

「お母さん……」

「お母さんとはぐれちゃったの？」

私も一応、加わる。ヒツキーだけに任せていたら通報されるかもしれないし……。

「うん……お母さん……」

「迷子かあ……」

ヒツキーがため息をつく。それから、自分の来ていたアウターを女の子に掛けてあげる。

「風邪ひくぞ、これくらい着とけ」

ぶつきらばうに言ってから、今度は自販機であたたかいミルクティを買ってきて女の子に渡す。

「ありがとうお兄ちゃん……」

「ああ、気にすんな」

まず女の子をベンチに座らせてから、ヒッキーはどこかに電話をする。私は特に出来ることがなくて、女の子とお話をしてみた。

「お名前は？」

「ゆずか！」

「へえ、ゆずかちゃんって言うんだ。私は結衣だよ。いいお名前してるね」

「結衣もいい名前だよ？」

「ありがとうー！ 可愛いねー！」

言いながら私はゆずかちゃんを抱きしめる。

そんなやりとりをしていると、ヒッキーが近付いてきた。電話の先は警察みたいで、こつちに向かってきているらしい。それで少女の名前を聞いてくる。

「ゆずかちゃんだって言ってたよ」

「わかった……。ゆずかちゃん、君の苗字はなんていうの？」

ヒッキーらしくもなく優しい口調だ。さすが小さい子好き……。子どもができたらこんな感じなのかな……。って落ち着いて私！ 今は緊急事態なの！

「ばんすい！ ばんすいゆずか！」

「そっか。ありがとうね。俺はとべ、とべかけるって言うんだよ」
ってヒッキーなに、嘘教えてるの！

だけど、つつこむのは難しい。きつと後で指摘したら、「いいんだよ、子どもは知らず知らずのうちに嘘をつかれてるもんだ、そうやって大人になつていくんだよ」なんて語られそう……。

すぐにヒッキーはスマホに耳を戻して、また話し込んでしまった。

それから十分ほど待つと、パトカーが公園の前に着いた。警察官と一緒に女の人が降りてくる。

「ママー！」

ゆずかちゃんも私は私たちなんて気にすることなく一目散にお母さんっぽい人のところに走っていく。私たちもゆっくりそれに続いた。

「ゆずかー！」

二人が抱き合っているところにゆっくりついていくと、お母さんが私たちに気づいた。

「あ、あなたたちですか?! 本当に、本当にありがとうございます! そしてごめんなさい」

「いえ気にしないでください。無事再会出来たようで良かったです」

初めて見るような優しい口振りで言ってから、ヒツキーは警察官に呼ばれて話をしに行く。

その間、置いていかれた私はゆずかちちゃんに話し掛けられた。

「彼氏なの？」

「え？」

「こらゆずか、失礼でしょ」

つい叫んでしまつて、お母さんがゆずかちちゃんを叱る。私は気にしないでくださいと言つてから苦笑い混じりにゆずかちちゃんを諭す。

「彼氏じゃないよ」

「えー、そうなの？　じゃあ友達？」

彼氏じゃない、けれど今、男女で一緒にいる。確かに、小学生から見たら友達に思えるかもしれない。でも、きつとそうじゃない。

「違うよ、友達でもない」

「えー、じゃあなにー？」

私はふふつと不敵に笑つてから、まるで囁くみたいに、落ち着いて静かに言葉を漏らす。

「——好きな人、だよ」

× × ×

あのあと、俺たちが帰ったのは九時半を回っていて、音沙汰もなかったため、めっちゃ怒られた。主に雪ノ下に、っていうか雪ノ下だけに。

怒っているだけのようで、実際、めちゃくちゃ心配してたんだろうし、愛いやつめ。

少女はあの公園の近くに住んでいた子で、探検と称して歩き回っていたうちに帰れなくなつたようだ。来ていた服も途中で暑くなつて脱いだ時にどこかに忘れてきたらしい。

まあ不可解なのは実はそこではない。

一番の謎は、何故去り際、お母さんもゆずかちゃんもすごくここにこしていて、由比ヶ浜が俯いて、頬を赤く染めていたからだ。

結局、由比ヶ浜は教えてくれないし、ゆずかちゃんたちはそのまま帰ってしまった。

そして、これから三次会が始まるらしい。

俺は寝ぼけそうなくらい眠たい眼を擦って、由比ヶ浜の音頭に、腕の上に突き上げる。

『小町ちゃん、おめでどうっ！』

あんなに面倒なことがあったにもかかわらず、疲れ知らずなのかこいつは。なんて思いつながら、さりとて、いいやつだなと俺は苦笑いする。

こんなのが彼女だったら楽しそうだ。

そんな一言は決して口には出さず、しかし、小さい子と触れ合っている時の由比ヶ浜の横顔を思い出して、全部を心にしまうように、俺はぐいっとマツ缶を呷った。

正解の祝福

ジューンブライド。

結婚式は六月が良いというあれ。女の子のあこがれではあるけれど、商業的利用感も否めない。

他方、うちの誕生日でもある。

× × ×

「おはよう」

いつものように鞆を机に掛けながらすでに習慣となった挨拶を優香と詩羽に投げかけた。

「あ、おはよう、南ほら」

声と同時にほいと放られたものをうまく受け止める。

赤い紙の外装を白色のリボンで止めている小さな小包だった。

「何これ」

「誕生日プレゼント」

優香は面映ゆさを隠せない表情でぼりぼりと頬をかいた。

「え……」

「あ、私からも」

言いながら詩羽も小包をポイとうちの方に投げる。

桃色の紙に包まれて、優香のプレゼントよりも少し大きめだった。

うちは手元にある二つの小包を何度も見返した。

「……覚えててくれたんだ」

思わず目に涙が浮かぶ。

実際、一週間くらい前の結衣ちゃん誕生日に比べれば雀の涙ほどだ。それでも去年の文化祭から妙な距離感があったこのグループだ。貰えた、見放されていなかったという事実のうちには感極まってしまった。

「……ありがとう」

消え入るような声でうちは呟いた。

「ま、南がほんとに貰いたかったのは私たちじゃないだろうけどー？」

「あ、それぞれ」

先の空気を打ち払うように、優香に詩羽が賛同する。

「え、どういう意味？」

「ほらほらホームルーム始まるよ」

見れば時計はホームルーム開始一分前を指していた。

「あとで聞くからね！ あ、あとこれ開けていい？」

「もちろん」

「そっかありがとね！」

とにかく、気分が良かった私は特に気にすることなく席に戻った。

やがてホームルームが始まり、担任の連絡事項を聞きながら、うちはこっそり包装を剥いだ。

まずは優香の……。

完全に包装を開ききると中からは大きく文字が書かれたポケットサイズくらいの本が。

『必勝！ 気になる相手を手中に収めるための100の魔法』

……は？

何この胡散臭いタイトル……。

まあいいや、次は詩羽のを……。

『女の色気を最大限引き出す！』

またしても出てきたのは同じような本だった。

まったく……。なんなの？ 平塚先生でもこんなの買うか怪しいよ？

ていうか付録でセクシーランジェリーってどういうこと？ 付録の方が高そうなんだけど。

うちはしばらくその二つを、固まったまま眺め続けた。

「相模」

いつの間にホームルームが終わっていたのか、不意に上から声をかけられて反射的に見る。

「えっと、その、本読んできるところ悪いんだが……」

声の主は比企谷だった。文化祭以来話した記憶もなく、驚くより先に、本を見られたことが恥ずかしい。

「いや、違うから！」

「お、おう……。取り敢えず相模」

それから比企谷は一呼吸おいた。

「放課後奉仕部来て欲しいんだが……」

× × ×

どきりどきり、と今にも心臓が飛び出しそうだ。

奉仕部を訪れるのは去年のあれから約一年ぶり。しかも、うちは最悪の結果を残したのだ。

今更どんな顔で行けば……。

うちがあれやこれや戸の前で悩んでいると、突然ガラリと開かれた。

「あ、さがみん」

お団子頭に明るい色の髪。くりくりとした目には彼女の意思が大きく反映されているように思えた。

「結衣ちゃん……」

本当に思いがけない鉢合わせ。絶対きまずいよ結衣ちゃんも……。

しかし結衣ちゃんはずちの手をひいて部室内に戻る。

「さがみん来たよー！」

うちの手を引きながら結衣ちゃんの元気な声で大きな声が戸から窓まで伝播する。

「あらそう」

「来たのか」

迎えられているのか、よくわからないまま、結衣ちゃんの進む方に身を預ける。

比企谷が下座に席を用意した。下座と言っても依頼人席だけだ。

テーブルの上には大きめな——手作りかはわからないけど——ケーキが置いてあった。

うちが席に座らせられると、同時にクラッカーが鳴った。

「ハッピーバースデー！」

大きな声が——主に結衣ちゃんだけど——小さな部室にこだました。

「え……」

未だに状況を読めないうちに、雪ノ下さんはこほんと一つ咳払いする。

「文化祭、体育祭と私たちなりに反省していたの」

「え、いやうちのほうこそ……」

突然、忌々しい過去を掘り返されて私は思わずたじろいだ。

「確かに悪いのはおおかた相模さんよ。けれど、心情を察することが出来ずに話を進めた私にも非はあったわ」

「そんなこと」

ない、とは言えなかった。うち自身反省している。だから体育祭だつてちつぽけなプライドを捨てて、頑張った。でも、用意された逃げ道を防ぐほどうちは人間ができていない。いや、無理にでも塞ぐ時なのかもしれない。

「そんなことない！」

うちじゃない。自分の意識とは離れた、また別の意識が言ったのだ。

雪ノ下さんはふふと笑みをこぼした。うちはその意味を察せず、「なに？」と詰め寄るような口調で尋ねてしまった。

雪ノ下さんは突然、比企谷を見る。

「あなたもちゃんと謝りなさい。比企谷くん」

え、と比企谷は一瞬狼狽える。

しかし、少し虚ろな目と表情を浮かべると、何かを決断したように「そうだな」と一言呟いた。うちは慌てて取り繕う。

「いいの！ あれは私が悪かったの！」

「その通りだよさがみん。でも、私はわざわざヒツキーあんなこと言う必要もなかったと思う」

「それは……」

あの時比企谷に言われたことは事実だった。普通、あの場はあの流れで葉山くんが収めただろう。

でも、比企谷も気に入らなかったのだろうと思う。

最低なことをしてもなお、居場所を求めて迷惑をかけ、何より雪ノ下さんの成果を蔑ろにしようとしたうちのことを。

「悪かった、相模」

うちが俯いていた顔を上げると申し訳なさそうに比企谷が頭を下げていた。

不意に頭に妙案が浮かんだ。

当意即妙。迅速果斷。

「もう遅いよ、比企谷」

うちは含みのある口調で比企谷に詰め寄った。立ち上がらせて手を引く。そして一気に走り出す。

「ちよ、ちよつとさがみん?!」

「ごめんね結衣ちゃん! ちよつと借りるね!」

言いながら一気に戸を開け放つ。

「おい、相模?!」

聞こえないーい、聞こえないーい。

「しっつれいしましたあー!」

これまた大きな声で言い放って、うちは奉仕部を後にした。

× × ×

「ベストプレイス……」

うちは比企谷を連れて、比企谷がいつもいる、テニス部が大きく見える、ベストプレイス（笑）に来ていた。

そしてうちは唐突に、衝動的に、まるで運動部のごとく大きな声で謝った。

「比企谷、ごめんなさい!」

「うお、え、は?」

狼狽える比企谷。

「あの時のうち、ホント、ハブられても仕方ないくらい最低だったと思う——」

うちは比企谷の表情を伺う。

そして、うちの独白が始まった。

話を終える頃には、なんと比企谷は眠っていた。

最初こそ相づちを打っていたものの、三十分を過ぎたところから反応が聞こえなくなつた。うちは構わず話し続けたけど、比企谷は眠ってしまったみたい。

比企谷は相変わらずすーすーと俯きながら小さく寝息を立てている。

「つたくむかつく寝顔——」

うちは軽く石ころを蹴った。

まあ、いいか。

文化祭とか体育祭とか色々謝ったけど、比企谷からしたら取るに足らないことだったんだ。

きつと、うちが反省していれば十分なんだよね。

うざいし、面倒だし、皮肉屋だし。

良いところ挙げろなんて無理難題だけど、今はそんなこいつは嫌いじゃない。

「ありがと比企谷」

消え入るように眩くと、眠っているはずの比企谷の頬がほんのり紅く染まった気がした。

「起きてんじゃん！」

うちは思い切り蹴り飛ばした。

× × ×

少し経って奉仕部に戻ると、こちらはケーキを食べた。

どうやら雪ノ下さんと結衣ちゃんが作ったらしい。比企谷は結衣ちゃんと作ったと聞くと手が震えていた。

結衣ちゃんは料理が出来ないらしい。ここはうちのアドバンテージかな。まあ、雪ノ下さんは簡単にこなしちやいそうだけど。

自己完結でも、解決した後のケーキは甘くて美味しかった。不意に比企谷が立ち上がった。

「口直しにマッ缶買ってくるわ」

そのまま戸の方に歩いていく。

「甘いものに甘いものって頭おかしいのかしら」

「純粹に悪口言うのやめろ」

比企谷は雪ノ下さんと軽口を叩くとすぐに部室を出た。

チャンスだ！

うちもバンと机を叩いて唐突に立ち上がった。二人がビクリと震えた。気に入らないけどちよつと可愛い。

「うち……！」

うちは高らかに声を上げた。

「え、な、なにさがみん……」

「うちは二人には負けないから！」

「……え？」

二人ともポカンとしていた。

結衣ちゃんは意味を徐々に察したのか好戦的な目線をうちに向ける。

雪ノ下さんは小首をかしげていた。

……だからなんでそれで可愛いのか？！

「わ、私だって負けないよ！」

結衣ちゃんはグーを上突き出す。

「わ、私だって負けないわ！」

雪ノ下さんが意味もわからず単純に負けず嫌いで対抗してきたのは見え見えだった。うちと結衣ちゃんは笑みを零す。

「ゆきのん可愛い」

「ほんと、可愛い」

雪ノ下さんは「え？」と珍しく動揺している。

これは負けるかもしれない。

そんな事が頭に浮かんだけどすぐにかき消した。

「何が何でも比企谷はうちのものだから！」

今度は雪ノ下さんにも分かりやすいように高らかに宣言すると、うちはまた一口、ケーキを口内に放り込んだ。

かおりのリズムで ゼーンペン

中学を卒業してから幾何か経った。

私は海浜総合高校に進んで、自然と中学の頃と何ら変わらない生活を送っていた。笑って。

楽しんで。

私はそんな自分の生活が充実していると思っていたし、満足していた。

けれどそれはあいつに再会してから変わった。

いや、変えられた。

私の価値観そのものを。

× × ×

急激に冷え込み、毎日震えて起きる朝を迎える十二月。

いつもの様に登校すると、生徒会のイベントについて話を持ち掛けられた。

私は生徒会のメンバーではないが、どうしてか手伝うことが多くなっていて、例に漏れず今回もそうだった。

友達に話すと会長に狙われてるんじゃないのかと冗談めかして言われたがあながち

間違っていないような気もする。

けれど、特にすることも無く、暇を持って余っていたので私は迷うことなく参加した。話が進むうちに総武高校へ参加を打診したと聞いた。

総武高と聞いて、誰か知っている人いたかなと考えてみたが特に思い浮かぶ人はいなかった。

葉山くんは会いづらいし、サッカーも忙しいだろうし。

× × ×

会議初日。

特に考えることもなく私もコミュニティセンターに向かった。

中に入ると総武だろう人たちが少しずつ集まっていた中に一人見知った顔が見えた。

私は思わず話しかける。

「比企谷？」

「……………あ？」

「……………折本」

偶然にも再会した比企谷は、私に気づくと苦虫を噛み潰したような顔になった。

私はあえてそれを気にせず話しかける。

「比企谷って生徒会だったの？」

「いや別に」

「じゃあ私と同じだねー」

「そうか」

「……」

それきり会話は続かなかった。

他者から見れば私たちの間に隙意があるように見えただろう。

正しくその通りだ。

中学の頃のことを考えたら当然だ。

私は中学の頃、比企谷に告られた。

そして、振った。

しかもそれは学校中に広がっていった。

あの時ほど登校しづらかったことはない。罪悪感で押し潰れそうだった。

いくら私が噂を広げていないとはいえ、友達に軽々しく話した私にも責任の一端があるのは明らかだったからだ。

それからつい最近、また再会した。

その時もまたやってしまったのだ。

私は変わろうとして、変わることもなく同じ過ちを繰り返してしまった。

更に今、比企谷は気になる存在に……。やめよう。

比企谷と別れて、一人悶々としてしていると、恙無く会議は始まった。

× × ×

進むことない会議からまた数日経って、いよいよイベントの一週間前になった。

相変わらず会議は進まない。

私は原因に気づいていながらも目を瞑っていた。

海浜での人間関係っていうのもあったし、波風を立てたくないというのもあった。

どうせ今日も進まないんだろうなと適当に賛同している時だった。

「……合同でやる必要ってあるか？」

突然、比企谷が口を開いた。

停滞した会議を進めるためだろうか。

だが一色ちゃんや副会長が何を言っても聞く耳を持たない、こちらの轆轤会長を説得などできるのか。

要点を掴めていない、本質が分からない私にはとても解決できるとは思えなかった。

予想通りうちの会長は何か訳の分からない御託を並べる。

「それは、合同でやることでグループシナジーを生んで、大きなイベントを」

「シナジーなんかどこにもないし、それに、大きくって言ったって、このままだと大したことできないだろ。なのに、なんでまだ形にこだわるんだ」

比企谷の言葉は、糾弾するようでもあり、詰問するようでもあった。

その比企谷を責めるようにこちら側からひそひそと声がする。

会長は焦っているのか早口で捲し立てる。

「企画意図とずれてるし。それにコンセンサスはとれてたし、グランドデザインの共有もできていたわけで……」

会長の言葉から少し間が空いて、比企谷は口の端を歪めて重々しく口を開く。

「……違うな。自分はできると思って、思い上がってたんだよ。だから、まちがえても認められなかったんだ。自分の失敗を誤魔化したかったんだろ。そのために、策を弄した。言葉を弄した。言質をとって安心しようとした。まちがえたとき、誰かのせいにくきたら楽だからな」

どうしてか、声には自嘲が混じっているような感じがあった。

そして、私はこの会議の問題点を理解することが出来た。

それからは早かった。

こちら側から出た反対意見、いや、否定させまいと奮起する言葉を雪ノ下さんが潰し、由比ヶ浜さんがフォローする。

そして、ようやくのことで、この会議は終止符を打たれた。

× × ×

「なんか変わったね。比企谷」

会議が終わり、帰りの支度をして自動販売機に寄ると、比企谷がいた。

私は躊躇することなく話しかけた。

「折本か。別になんも変わってねえよ」

「そう？ 少なくとも中学の頃よりは……」

「案外、見る側に問題があるのかもね」

「は？」

「私が比企谷のことをつまらないやつだと言ってたのは私がちゃんと見てなかったからかもってこと！」

「いや俺つままない人間だし」

「卑屈にならない！ 比企谷は凄いやつだよ！」

「……はあ。そういうことにしとくわ」

「うんうん」

「じゃあ俺もう帰るから」

そう言うと比企谷は鞆を手取る。

「あ、そうなの？　じゃあまた今度」

「……………帰り、気をつけて帰れよ」

「……………うん。ありがと」

比企谷は私の返事を聞くこともなく、すぐに去っていった。

× × ×

クリスマスイベントが終わってから一週間ほど。

もう少しでお正月だ。

新年を迎えるのに、色々買い足そうと私は千葉駅まできた。

買い物をする前にウィンドウショッピングでもしようと思つてぐるぐるとお店を回

る。

だが特にめぼしいものも見つからず、ベンチに座っていた。

ぼーっと人の波を見つめる。

あいつなら何か文句ばかり言いそうだ。

そう思つてふと視線をそらすと、そこで偶然にも、ぴよんぴよんとはねるアホ毛を見

つけた。

私は迷わず話しかける。

「比企谷！……………と一色ちゃん？」

思わず出しかけていた声は萎んでいき、妙な嫉妬感のようなものが芽生えた。

「あ、折本？」

「……………」

「こ、こんにちはー。比企谷、一色ちゃん……」

時既に遅く、私は二人に気づかれた。

かおりのリズムで こうへん

「……」

私を含めて三人は、ひたすら黙りこくっていた。

比企谷はいきなり会った気まずさからだろうか。

一色ちゃんは、簡単に察することが出来る。

恐らくだが。

私はベンチから離れると、二人に別れを告げて、
買い物の続きに行こうとする。

だが、それは止められた。

「折本先輩も行きますしよーよー」

一色ちゃんの一言で。

× × ×

どういうつもりなのかまったく分からなかった。

今の一色ちゃんから見れば、私は敵のはずだ。

……どういうこと？

まさか私が強すぎて、諦めたとか？

あはは……。それはないな……。

私が一人、ぐぬぬと思索していると、不意に耳元で囁かれた。

「折本先輩。少しだけチャンスあげますよ。まあ、私の勝ちですけど」

振り返ると、比企谷から離れ、打算と余裕に満ちた一色ちゃんがこちらを見て立っていた。

なるほど……。

優しさに見せかけて、敵を潰していくつもりか……。

なかなかやるな……。

しかし負けている訳にはいかない。

それで私も一色ちゃんの耳元で囁く。

「私の中学からのアドバンテージなめないでよね」

あ、やべ。

勢いで言つて、気づいた。

アドバンテージどころかマイナスだった……。

だが一色ちゃんには効いたようで、さっきの私のようにぐぬぬと考え込んでいる。そのまま考え込んでいなさい！　と思つたが一色ちゃんはすぐに私の耳元に来る。

「そんなの関係ないですよ」

そこまで言うてにっこり微笑むと、今度は大きな声でまた言葉をついだ。

「だって、私先輩に何度も告白されかけてますから！」

あまりに唐突で、私も思わず大きな声になってしまう。

「は、はあ？ わ、私だって一回告られたし！」

「いやいや、嘘までついて」

「一色ちゃんこそ！」

それから続いた私たちの応酬を、比企谷はただ傍観すると、そのまま無言で離れていった。

「ちよつと待つて！ 比企谷」

「せんばい！」

「いや、俺は関係ないので」

言いかけて、比企谷は周りをぐるりと見渡した。

「……というか周りの視線が」

比企谷が付け足すように言った。

周りを見渡すと、私たちは周囲の視線を一点に集めていた。

それに気づいたのか、一色ちゃんは顔を赤らめる。

「もう、せんばいが悪いんですからね！」

「ホント、ホント！ 悪いのは比企谷！」

「は？ 何その理不尽。まあいいから早く立ち去ろうぜ」

私たちは比企谷の声を合図に、計り知れないほど気まずい空間から抜け出した。

× × ×

「で、比企谷。私だけじゃなく節操も無しに一色ちゃんにも告ったわけ？」

「せんばい。まさか折本先輩に告ったなんて嘘ですよね」

あれから三十分ほど。私たちは近くにあった公園に移動すると、比企谷を責めるように詰問していた。

「いやだから……」

対して、比企谷はしどろもどろに私たちの質問を躲していた。

まったく、いい加減答えればいいのに。

私が唯一、一色ちゃんに勝てることは以前告られたことくらいなのだ。

今、比企谷の答えによっては、私のアドバンテージが大きく失われてしまう。

というか、一色ちゃん。告られたって本当？ 必死に取り繕っていて、なんか怪しいんだけど……。

「とにかく！ 比企谷は一色ちゃんに告ったことがないの？ あるの？」

「それは断言出来る。ないぞ」

「それは？ まさか折本先輩に告ったのってマジだったんじや……」

「いや、違う……？ 違うないこともない……？」

「まさか今も、折本先輩のことが好きなんじや……」

「それはない」

即答だった。

私は思わず、比企谷の足を踏みつける。

「いてえ」

眩いた比企谷を軽く睨むとすぐに視線を逸らされた。

……盛り上がってるの、私一人か。

「まあ、この位にしておいてあげようよ」

少しダメージを受けた私が、比企谷の宥恕を提案すると、一色ちゃんは少し間をあけてから食い下がらず、納得した。

「……そうですね。まあ今回は許してあげます」

「いやなんで俺が悪いみたいに」

「比企谷、うるさい」

「せんぱい、うるさいです」

「あーはいはい」

比企谷は面倒そうに呟くと、公園の中心にあつた噴水を眺める。その視線は、どこか懐かしむようで、嬉しそうでもあつた。

……ドMなのか。

まあそうではないだろう。

充実している今を理解していて、噛み締めている。

いつかと比べると自然とそうなるのだろう。

私はその、いつかを知る一人だが。

「じゃあお買い物行きましょうか」

「そーだねー。私も買い物したいものあるから」

「じゃあさっさと行くぞ」

× × ×

「今日はありがとねー」

「いえいえこちらこそー」

夕方、およそ六時。

私たちは買い物を終え、帰宅の途についていた。

「んじゃあな。俺先に帰るから。一色はモノレールだよな？」

「はい」

「……ここまで来れば十分だろ」

「……じゃあ名残惜しいですけど……」

言いかけて、一色ちゃんは私の方に振り返った。

「今日はありがとうございました」

そう言うのと、恭しく頭を下げる。

意外としつかりしているなと思ったのも束の間。

一色ちゃんは耳元で囁く。

「これからはチャンスあげませんけどね」

言って、そのままぴよんぴよんと後ろに下がると、あざとく手を振って駅に戻って行った。

……やだ、なにあの子。

お友達になれないタイプね。

比企谷の方を見ると、不思議そうな顔をしている。

私は比企谷の方に振り返ると、口を開いた。

「比企谷。ちよつと着いてきてよ」

お願いするように言うと、比企谷は嫌そうな顔をして「どこに」と尋ねる。

「秘密！」

私はそう言うと、比企谷の手を引いて歩き出した。

× × ×

三十分ほど歩いて着いたのは、外界から切り離されたように静かな公園。ぼつぼつとある灯りは控えめで、仄かに幻想的な空間を作り出している。

私たちは入口にある自販機でそれぞれ飲み物を買おうと、公園の奥へと進んでいった。歩いている間もたわいの無い話をしていた。

「MAXコーヒーってなに」とか、「最近学校はどう？」とか。

やがて私の一方的な会話も尽きてくると、ベンチが見えた。

その少し先には東京湾が広がっている。

近づくと、眼前の湾は煌びやかに、人々の生活の明かりを映えていた。

私は何度か見たその光景に「うわあ」と声を漏らすと、同じく感動しているのか、よく分からない比企谷に声をかけた。

「どうっ？」

「どう、ってそりやまあいいんじゃないやねえの？」

「何それ、ウケる」

「いや、うけねーし」

「……」

どちらからともなく会話が切れる。

流れる沈黙は気まずいものでは無かった。

寧ろ、心地よいものでさえあった。

やはり、タイミングは今、だろうか。

そう思って、口火を切る。

「……あのさ、比企谷」

「……なんだ」

「えっと、その、私……」

「……」

思わず言い淀む。

そう言えば私、まだ誰かに告白したことかないんだけど……。

あ、付き合ったこともないわ……。

私の初体験？ 比企谷!?

……やっぱり恥ずかしい。

でも、言うしかない！

一色ちゃんに先手を打たれる前に！

「私、実は——」

「おい、お前携帯鳴ってるぞ」

出しかけた言葉は、見事に比企谷に遮られた。

無視するわけにもいかず、渋々確認すると、お母さんから何通も電話が来ていた。

私はマナーモードにすると、言葉の続きを紡ごうとする。

「あのさ。えーつと、その。私は……」

言いかけると、比企谷は口の端を歪めていることに気づいた。

どこかで見た表情だ。

あ、クリスマスイベントの時か。

確か、会長に一矢報いた時もこんな表情だったなあ……。

私は次に出る言葉を落ち着いて受け取ろうと、妙にシリアスな雰囲気になった。

そして比企谷は重々しく口を開く。

「……電話出なくていいのか」

たったそれだけの短い言葉。

それでも今の私を静止するには十分すぎる言葉だった。

その言葉は、咎めるようで、何かを止めさせるようでもあった。

私の思い込みかもしれないが、暗に先は分かっている。だからこれ以上言うな、と重

圧をかけられているような気がした。

比企谷の目は相変わらず腐っているが、どこか憂いを帯びていた。

——だからこそ。

だからこそ、私には伝えるべき言葉があった。

逃げられない壁があった。

逃げたくない先があった。

私にはシリアスなんて似合わない。

そんな傍から見たら痛々しいことを考えながら私は再度、比企谷に向き直る。

「私、比企谷のことが好き」

きつとあいつには分かっていた筈なのに、その瞬間、時が止まった。

× × ×

「私、比企谷のことが好き」

私は二度おなじ言葉を繰り返す。

うまく飲み込めてなさそうな比企谷は、少し表情を歪めた。

「お前、何言ってる……」

「だ・か・ら！ 私、比企谷のことが好きなの！ ラブなの！」

私は吹っ切れたように大声を出す。

今は七時半くらいかな。

少し離れたベンチに座っていたカップルはこちらを観察するような視線を送ってくる。

「……………そうか」

「……………うん」

沈黙が流れて、少し間が空いた。

その間に比企谷は考えたようで、大きく息を吸い込むと、そのまま吐き出した。

私は、どうしてか、次に比企谷が口から出そうとしている言葉に予想がついた。

私は身構える。

「お前、それは勘違い……………」

あまりに予想通りで少しにやけると、私は食いつくように言葉を遮った。

「違う！ マジだよマジ！ 大真面目！ 中学の頃に私に告った比企谷とは違うの」

「いや今それ出す？」

「当たり前じゃん。私は本気だよ？ ……それで、どうするの？」

完全に吹っ切れていた。

特に考えていることなどない。

とにかく、必死に、必死に伝えようとしていた。

「どうするって……」

「比企谷にも真剣さが伝わったようで、いつものように、しどろもどろになっていた。これは女の、私の矜持に関わるよ！」

「ちゃんと答えてもらおうからね、比企谷！」

すると、比企谷は諦めたように本当に重々しく、申し訳なさそうに口を開いた。

「……俺はお前とは付き合えない」

「……っ。……ど、どうしてか聞いていい？」

私が振ってきた相手もこんな気持ちだったのだろうか。

全然平気だと思っていたのに、意外と堪えるな……。

私は震える体を抑えて、尋ねた。

「俺にはお前みたいなのがリア充代表みたいなやつと付き合う資格なんてないし、お前と一緒に歩いて、恥をかかせるのも嫌だしな」

「はっ。」

思わず口から漏れる。

いやマジで何言ってるのこいつ……。

「いやだから——」

「私が比企谷と街なんて歩くわけないでしょ？」

「は？」

私の返答は予想外だったようで比企谷は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしていた。

「だって恥ずかしいし」

「……………は？ 今の告白って男女としてってことだよな？」

「うん。そうだけど？」

「私は比企谷の隣で歩くのが恥ずかしいって言ってるの。……………こない奴の隣を私が歩いていいのかって」

自分が支離滅裂なことを言っつて、本質から目を逸らしていることは重々承知していた。

「何、それ。意味分かんねえ……………」

「とにかく、お互いにアレならマイナスとマイナスでプラス！ 分かるよね？ だか

らお互いにセーフ！」

いやマジで何言っつてんの私……………」

「は？ お前何言っつて……………」

「いいの！」

「いや良くないだろ」

「いいの！」

「……………はあ」

「……………それで比企谷は私のことどう思ってるの？」

私は不安そうに若干見上げるように尋ねる。

これが唯一、一色ちゃんから学んだ処世術だ。

比企谷はまた一つため息をつくと言葉を絞り出す。

「……………俺は。……………俺は折本のことを、折本にそんな感情は持っていない。……………ただ、友達くらいなら……………」

「……………いいかもな」

比企谷は付け足すようにぼしよりと呟く。

対して、私は努めて明るく振舞った。

「そ、そう！ でもチャンスが無いわけじゃないんだね！ ぼっちの比企谷と友達になれるわけだし」

「ば、ばかやろう！ ぼっちじゃねえ……………、こともない。戸塚は……………？」

誰だよ、戸塚。

「……………まあいいや。というか比企谷誰とも付き合っていないんだよね」

「ああ。当たり前だ。俺が人に好かれるわけ……………、ありましたね」

「ホント、最悪！」

「すまん……」

「でも、なら安心だね」

「何が」

比企谷が私に問うた。

私はそれをスルーしてスマホを取り出す。

「あ、もう八時じゃん！ 帰ろ！」

「おい、無視してんじゃねえ」

「かーえろ、帰ろ。お家へ帰ろっ」

「ったく何なんだ」

そう言うと比企谷は先に歩き出した私に黙ってついてくる。

私は歩きながら、お母さんに返信した。

やがて公園の入口に差し掛かった。

比企谷は一刻も早く帰りたいようで、足早に去ろうとした。

だが、すぐに立ち止まる。

「……じゃあな折本。……いや、家まで送るか？」

……だから、そういうところあざといんだっつーの。

私以外にやらないでね……？

「いや、大丈夫！ ありがとう」

「そうか。……じゃあな」

比企谷は私に手を振ると、そのまますぐに出ていく。

少し距離がついたことを確認すると、私は大きく息を吸った。

「私、これからどんだん比企谷を攻略していくからね！」

目の前で走り出す比企谷が見えた。

まあ、これもご愛嬌だ。

私は何気なく星に満ちた天を仰ぐ。

それが不味かったようで、私は妙に感傷的になってしまった。

「……………うぐつ。ひぐつ。比企谷あ…………。ばかあ…………！」

私は堪えきれず慟哭した。

それから私は家に帰るまで、ずっと涙をこぼし続けた。

はるのんは手に入りたい。前編

「やつはろー」

やけに明るい声が入った。

俺が昼飯を食べようと、ファーストフード店に入つてすぐだ。

普段なら、悪意のような、殺意のようなオーラのこの人に気づかないわけではないのだが今日はどうしてか見抜くことが出来なかった。

「……なんすか。雪ノ下さん」

横目でちらりと覗き見ると、陽乃さんはいつもの笑みを浮かべて立っていた。

「何言つてんの。最近毎日会つてるじゃない」

陽乃さんは少し目を細めて、からかうように言った。

毎日つて……。

だがあながち間違っていない。

最近、陽乃さんはよく俺の前に現れて、俺に付きまどつてくる。

あれ？ ストーカー？

もう一ヶ月以上、ドライブに連れていかれたり、付きまとわれてるし、やつぱり通報

した方が……。

「もしかして、比企谷くんってストーカー？」

「いや違うから。俺がストーカーされてるから」

「まあいいや。今日、ここで会ったのも何かの縁だしうちに来ない？」

「……は？」

× × ×

「……………」

思わず息を呑む。

断る俺をよそに連れてこられたのは高級住宅街に煌煌と佇む一軒の大豪邸。

外観は和風。

いや、和風というか超和風。

なんか、もうアレだ。

超凄い。

「どーしたのー？ 比企谷くん」

「いや別に。というかどうして俺は連れてこられたんすかね」

「そんなの決まってるじゃない。雪乃ちゃんのことだよ？」

「なるほど。だから、私がここで叫んだらどうなるか分かるよね？ つて脅したんで

すね」

「まあいいよ、入りましたよ」

「いや良くないんですけど……」

陽乃さんは俺の言葉を聞かずに、自宅へ入っていく。

俺はそれを見計らうと、ここまで来れば叫ばれても問題ないと思い、走り出す体勢に移る。

だがそれはかなわなかった。

魔王は視界が三百六十度なのだろうか。

肩を掴まれてしまった。

こうなれば逃げる手段はない。

顔を窺うように見ると嫌な笑みを浮かべていた。

また何かドSなことでも始めるつもりか。

そう思つて動向を落ち着いて見守ると、陽乃さんは突然重たい雰囲気醸し出し始めた。

まさか、本当は何か別の話があつて俺を呼んだんじゃ……。

そう考える俺の思考を遮るように、陽乃さんは重々しく口を開く。

「……ねえ比企谷くん」

「……………なんすか」

「ご機嫌を取り損ねないよう、短く返す。」

「……………いつか私を助けてね……………」

「……………」

「いや、それ。俺じゃなくて妹の黒歴史……………」

「というかなんで知ってるの……………」

「そう思ったのも束の間。」

「私、本物が——」

「ごめんなさい」

「さ、早く入りましょ」

「はい……………」

「発言権を無くされた俺は、黙ってついていくことしか出来なくなつた。」

「中に入ると、また一段と凄かった。」

「しゃ、シャンデリア？ とか、中央に続く階段とか、レッドカーペットとか……………、ま

「さに金持ちを具現化したような家だ。」

というか靴はどこで脱げば……。

「比企谷くん。こつちこつち」

見れば、魔王がこちらに手招きしていた。

逆らう手立てもなく、村人Aである俺は仕方なくついていく。

少し進んで、突き当たりを左に曲がったところで部屋に案内される。

誰の部屋か分からなくて、反射的に尋ねた。

「えっと、ここは誰の……」

「ああ、ここ？　ここはねえ、雪乃ちゃんのお部屋」

「帰ります」

「冗談よ。私の部屋よ」

「帰ります」

また、ノータイムで返すと陽乃さんは少し悲しそうな、どこか憂いを帯びた表情になった。

「……きつと話せばもつとわかるんだって思う……」

いきなり言われて、戸惑う。

言外に何かを伝えたいのだろうか。

「でも、多分それでも分かんないんだよね。それで、多分ずっと分かんないままで、だ

けど、なんかそういうのが分かるっていうか……。やっぱりよく分かんないや……。でも、でもね……。あたしさ……」

ここまで言われて、やっと気づく。

「いや、それ俺の黒歴史じゃないですよね」

「そうだったけ？」

何でもなさそうな顔で陽乃さんが言う。

「いやあたしとか言ってるんじゃないすか」

「あはは。まあいいや」

陽乃さんは乾いた笑みで呟くと、俺を部屋に押し込めて離れていく。

「じゃあ、お茶入れてくるから待つてねー。……お姉さんの部屋、荒らしちゃダメだぞ？」

「はいはい」

俺がすかさず面倒そうに返すと陽乃さんはすぐに部屋から出ていった。

つたく。どこに監視カメラ付いてるか分からない魔王の部屋荒らせる訳ないだろ。

天帝の目も持つてるみたいだしな。

まあ今日は傀儡のように弄ばれないよう、静かにしていよう。

× × ×

五分ほど待つと、陽乃さんがコーヒーを二つ持ってきてくれた。

砂糖たっぷり入れたからね、と笑いながらコーヒーを渡され、一口飲んでみると、甘さはマックスコーヒー以上だった。

まじで病気になるんですけど……。

恨みがましく、陽乃さんを見るが気づく様子はない。

いや無視してるのか。

まあ出されたものに文句をつけるのも野暮だろうと俺はそのまま飲み続けた。

お互い黙っていて、沈黙が流れる。

陽乃さんは見た感じ機嫌が良さそうだ。

それで、今日はなんで連れてこられたんだと、尋ねる前に陽乃さんの真意を忖度する。だがこの人はいつも気まぐれで動くし、思い浮かぶことは少ない。

それでもその完璧さ故に、やはり裏を疑ってしまう。

「どうかしたの？」

にこにこ笑みを浮かべて、陽乃さんは俺に問う。

「いや、なんで連れてこられたのかと」

コーヒーをかき回しながら問い返す。

陽乃さんは一口、コーヒーを飲むと、はあ、と一息ついて口を開いた。

「雪乃ちゃんの話だつてさっき言ったじゃん」

言いながら、その表情はどこか固い。

「嘘っぽいですけど。それで雪ノ下の何を聞きたいんですか」

「えーつとねー」

陽乃さんは話を引き伸ばすように、間延びした口調で話し続ける。

「なんでそんな変な喋りかた……」

言いかけて、視界がぐわんと揺れる。

なんか、とてつもなく眠たい……。

そう思つて間もなく、俺はそのまま床に倒れ込んだ。

そして意識が離れる前に、ぼつりと眩かれた声が入った。

「……おやすみ、比企谷くん」

甘さは隠すためか……。

× × ×

ふふ、と思わず笑みを浮かべる。

緩んだ頬はなかなか戻らない。

まさか、私が年下の子に好意を抱くなんて。

そう思ったのも既に一ヶ月前。

比企谷くんはもう、私にとって魅力そのもの。
今日こそものにして大学の皆に自慢しないと。

私はそう決意すると、眠っている比企谷くんに視線を移した。

この子、最近、雪乃ちゃんやガハマちゃんだけじゃなくって一色ちゃんとかめぐりにも狙われてる節があるからなあ……。

……まずは縛るか。

Interlude — First part

ジリリリリ——。夜中は三時、丑三つ時を過ぎてもなお不気味な雰囲気の漂う時間。俺は億劫ながらも、鳴り止まぬ騒音を止めるため、寝ぼけ眼でスマホを手を取った。

『あ、先輩やつと出てくれた』

『……』

『なんで黙ってるんですか』

『……いや、なんかお前のスマホに男の声みたいな雑音が……』

え、嘘?! と耳をつんぎくような声で、一色が叫ぶ。おかげで一気に眠気が吹き飛んだ。しかし、仕方がない。こんな夜中に起こされたんだから、仕返しくらいしたくなる。

『嘘』

『はっ? マジ殺しますよ』

『直球だな……』

覚めてしまった目を擦りながら、起き上がる。寝起きでうまく力が入らず、残る眠気のままにまた寝転んだ。

『で、なに？ なんの用』

『いやそれがですね、ちよつと怖いことが今あつて』

『あながち外れてなかつたかもな、さっきのやつ』

『いえ、そういうのじゃなくて』

『じゃあ、なに。人間的な怖さ？ 確かにそれなら俺に相談するのがベストだよな』

いろはす、あつたまいいー！ なんて思つてたのもつかの間。俺は一色の次の言葉に凍りつくことになった。

『はるさん先輩が来ました』

ん……？ 何さん？ サンタさん？ それや大事だわあ。いろはすマジパネエ。

『まお……、雪ノ下陽乃さんが来ました』

『そつか。おやすみ』

すぐに通話を切つた。いや、関係ないから。魔王に知り合いかいらないから。

もう一眠りにつこうとスマホを横に置いて目を閉じると、次はどたばたと廊下を走る音が聞こえた。

これこそホラーだな、と思いつつも小町だと確信があつた。たとえば足音だろうと愛さえあれば分かる。

大方、怖い夢でも見たのだろう。しっかり愛でてやろう。

そんな軽い気持ちで、勢いよく戸を開けた小町を待ち受けた。

はあはあ、と息を切らす小町の目には涙が浮かんでいた。

「助けてお兄ちゃん！」

「おう、どうした小町」

やはり予想に違わない。

俺は小町に先を促した。

「きよ、恐怖の電話が……！」

「ああ、よくあるよな。怖い動画でも見てから寝たのか？」

「ち、違うよ！」

「いやまさか」

そこで不意に一色との通話を思い出した。再度確認したが、通話を切つてからも催促

は来ない。

「履歴にも残ってるもん！ ほら見て！」

がくがくと肩を震わす小町に促されたからには見ないわけにもいかない。

すると、五分前に不可解な履歴があった。

『雪ノ下陽乃』

「……小町」

「なに……?」

「お前が見たのは、夢だ」

「なにを言ってるの……お兄ちゃん」

「お前は、魔王とお友達になれると思うか?」

「ううん」

「つまりはそういうことだ」

俺が詭弁を弄すると小町は納得したように頷いた。相当恐ろしかったんだな。そう思えるほど、いつもの強引さがなりを潜めていた。

「じゃあ、おやすみ」

「うん、おやすみお兄ちゃん」

互いに挨拶してベッドに戻る。当然、小町は自分の部屋に戻った。

そして鳴り響くチャイム。

……ちよつと? 常識考えて? 陽乃さんのことだし、親が不在なことを知ってるかもしれないけど、ご近所迷惑だから。

これ以上は苦情が来そうだ。

きつとそんなことも見越して、押し続けてるだろう陽乃さんに乗るのは不愉快だが、致し方ない。

兄がひきこもりで晩にインターホンが鳴り続ける家なんて、瞬く間に心霊スポットになつてしまう。

兄ひきこもりじゃないけど。

「マジやめてください陽乃さん」

急ぎ足で玄関に向かい、半身を乗り出して扉を開けた。すると突然、ぐいつと腕を引つ張られた。

咄嗟に顔を確認すると、月に照らされながら、陽乃さんが妖艶な笑みを浮かべていた。陽乃さんは「こんばんは」なんて呑気に挨拶をする。

「じゃあ、行こっか」

「……は？」

どこへ、と聞くまでもなく俺はワンボックスカーに押し込まれた。抵抗することは出来そうだったが、陽乃さんがわざと触つてはいけないうところばかり強調してくるせいで突き放せなかった。当然、押し込まれてから後悔だけが残った。

車内は静寂に包まれていた。

しかし、確かに人は乗っていた。

最後列が由比ヶ浜、雪ノ下。中央列が一色、そして押し込まれた俺。運転席には陽乃さんが座った。

車内の時計を確認すると『AM 3:20』と表示されていた。もう連れていかれることは諦めるとして、俺は陽乃さんに尋ねる。

「どこ行くつもりですか」

「肝試し」

「は？」

「だーかーらあ、肝試しー！」

はあ、と俺はこれみよがしにため息をついた。最近、こういう事が多い。と言つても奉仕部や生徒会ではなく、陽乃さんがこう、俺を連れ出すことが増えた。ちなみに全て強制。

「じゃはっしーんー！」

「はっしーん……」

陽乃さんとは対照的に言わされた感が半端ない。一色なんてずっと俯いている。はるのんに何されたのん？

それから間もなく車は発進した。何故やら慣れたハンドル捌きだった。

「なんか慣れてますね」

「あはは……ホントだね」

由比ヶ浜が苦笑いをこぼす。何気なく言つたつもりだったが、お通夜みたいな雰囲気

は解消できそうだ。何なら肝試しは既に始まっていたとさえ言える。

「うん、まあねえ。ほら、私って何でもできるしさ」

「否定出来ないところに腹が立つのよね……」

やっと雪ノ下が口を開いた。怯えでもしていたのかと振り返ったが、万の一にもそんなことはありえなかつた。こちらの視線に気づいてか、雪ノ下は凜とした視線をこちらに向けた。しかし、すぐに閉口してしまった。

「しかし陽乃さんにしては安そうな車ですね、五百万いってないんじゃないですか？」
失礼を承知ながらも皮肉を込める。

「うん、まあね。親のお金だし、悪いかなって。ほら、私結婚したら献身的に尽くすタイプだからアピールしとこうと思って」

「誰に」

「比企谷くんに決まってるじゃん」

「あー、はいはい」

そんな戯言に付き合ってもらえない、という意思表示のつもりで適当に返した。窓の外
の移り変わる街並みを見ていてもなお、さっきまで俯いてた一色の視線が痛い。

「なんだよ」

「べつに」

ぷいっとそっぽを向く。なんだそれ、可愛いな。

しばらく静寂の車内で揺られ、時間感覚が狂い始めた頃、目的地に着いたようだった。「着いたよーう」なんて陽気な声に目を冴えさせられ、ゆつくり車を降りた。時間的に仕方ないが震えるような寒さが身を刺して、パーカーくらい持つてくれば良かったと後悔した。まあ、そんなことできる余裕なかったけど。

すると後ろから覆いかぶさるように何かに包まれた。手に取ると、オレンジ色のパーカーだった。にやにやこちらを伺う陽乃さんに尋ねる。

「なんすかこれ」

「私のパーカー」

「は？」

「寒そうだから使っていいよ」

「いやいや」

「いやいやいや」

「いやいやいやいや」

「何をアホなことをやっているのかしら」

パーカーを押し付けあっていると、雪ノ下に制された。いつもの遠まわしな毒ではなく、突き刺してすぐ殺すような、直接的な言葉だった。

「じゃあ借ります……」

「そうそうそれでいいの」

諦めて借りる。陽乃さんは全員が降りたことを確認すると車の鍵を掛けて先頭を切つて歩き出した。

な、なんて安心感なんだ。

特に会話もなくしばらく歩く。道中生い茂った草木や妙に綺麗に反射する水たまりに過剰に反応して陽乃さんに笑われたこと以外は特に問題はなかった。由比ヶ浜と一色は自分のことに夢中で、俺には一瞥もくれなかった。

「はい到着——」

声を聞いて先を見上げると、明らかな廃墟が建っていた。時間は四時を回ったが、月の明かりは相変わらず煌々としていて、その不思議な雰囲気気圧された。

「じゃあクジで二対二対一に分けようか」

「いやおかしいから」

「そうですよ、おかしすぎます」

身の危険を感じたのか、先まで黙っていた一色も抗議の声をあげた。雪ノ下と由比ヶ浜もそれに続いた。ともすれば、一人で行きそうな雪ノ下さえも怯む。それくらいには不思議な圧倒感があつた。

ちらつと陽乃さんを見れば満足そうな笑みを浮かべていた。対象的に一色は俺に張りついて離れない。

「じゃあ、2対3に分けようか」

言うが早いか、陽乃さんはてきぱきくじを引かせる。俺と陽乃さんが一緒になる確率は……、と類推してみる。しかし、途中で重大なこと気がついた。俺、数学できないだった……。

やがて間もなく、俺の番が回ってきた。陽乃さんだけはやめて！と念には念を入れて祈る。割り箸の端に赤で書かれた数字を見やると、『1』と書かれていた。ペアは『1』と『2』、『3』と『4』と『5』なので俺は『2』の人と組むことになる。最後に陽乃さんがクジをひくのが見えた。再度祈っておこう。

……陽乃さんだけはやめて！